



国臨協関信

HP: <http://www.alpha-net.ne.jp/users/2/kansinko/>
パスワード: kansin

平成21年 8 月

事務局 〒162-0052 東京都新宿区戸山 1-21-1
国立国際医療センター戸山病院臨床検査部内
発行者 三浦隆雄
編集委員 渡司博幸・峰岸正明・深澤文子
久間修平
印刷所 東洋印刷株式会社
☎03-3352-7443

第37回 国臨協関信支部 学会・総会

日時: 平成21年9月5日(土)

場所: 国立国際医療センター戸山病院

COOL BIZ 宣言

学会には、どうぞ涼しげな軽装でご参加ください。
支部役員もノーネクタイで勤めさせていただきます。



	第1会場(5階大会議室)	第2会場(4階セミナールーム)	第3会場(4階第1会議室)
8:30	総合受付(5階ロビー)		
8:55	開 会 式		
9:00	一般演題 1~3 輸血 4~6 微生物 7~9 微生物 10~12 臨床化学・免疫血清 11:55 13~15 臨床化学 16~20 血液・その他	一般演題 21~23 生理 24~27 生理 28~31 生理 32~34 生理 35~37 生理 38~41 生理	一般演題 42~44 病理細胞 45~48 病理細胞 49~52 病理細胞 53~57 免疫血清 58~60 その他
	休 憩		
12:20~13:30	検体検査セミナー 「検体検査の現状と展望」	臨床検査技師長協議会総会(会場:戸山サンライズ)	
13:40~15:10	特別講演 自治医科大学 櫻林郁之介先生 「特定健診とその役割」		
15:20~16:30	チーム医療セミナー 「チーム医療における 検査技師の役割」		
16:35~17:05	学会セレモニー・閉会式		
17:10~17:40	関信支部定期総会	懇親会(戸山サンライズ)	
17:50			

学会セミナー 一覧

検体検査セミナー (第一会場 12:20~13:30)

「検体検査の現状と展望」

一般検査、生化・血清検査、血液検査は、臨床検査の原点であり、日常診療には不可欠となっています。しかし、近年病院内での検体検査部門を取り巻く環境は厳しく、採算性を重視するために外部委託を導入する施設が増加し、検体検査に携わる検査技師のモチベーションの維持に支障をきたす可能性が出てきています。今回の学会演題数からも、若い検査技師の興味が超音波検査等の生理検査に向いている傾向が窺われます。また遺伝子検査については、導入当初の予想に反して各施設での普及状況は今一つであります。そこで今回、各検体検査のスペシャリストを講師に迎えて、検体検査の重要性を再認識する目的で検体検査セミナーを企画しました。それぞれの検体検査の現状と今後の方向性についてお話していただきます。

座 長: 菊池 寿美子 (NHO村山医療センター)
演 者: 小関 満 (国立がんセンター中央病院)
生化・血清検査担当
演 者: 長田 健児 (国立国際医療センター戸山病院)
一般検査担当
演 者: 熊澤 寛子 (国立がんセンター中央病院)
血液検査担当
演 者: 柿島 裕樹 (国立成育医療センター)
遺伝子検査担当

チーム医療セミナー (第一会場 15:20~16:30)

「チーム医療における検査技師の役割」

チーム医療という言葉もすっかり定着し、各施設でいろいろな取り組みが進んでいる昨今、検査技師に求められる内容も多様化しています。しかしながら、我々にとっては経験の浅い分野もあり、どこまで参画して良いのか試行錯誤の中で実施しているのが現状と思われる。そこで今回、先陣を切りチーム医療の中で活躍されている講師の方々に、自施設での取り組み内容、参画当初における問題点、推奨する取り組み内容などの実体験を紹介していただき、各施設の今後の糧となるように今回のセミナーを企画しました。チーム医療参画は検査技師の業務拡大に繋がり、病院内において重要な役割を担っていくと考えられます。多くの皆様に参加していただき、自施設での成功例もしくは問題点などと対比していただくことにより、情報交換の場となることを期待しております。

座 長: 岩崎 康治 (NHO水戸医療センター)
演 者: 渡辺 靖 (国立成育医療センター)
感染制御チーム (ICT) 担当
演 者: 小池 容子 (NHO下志津病院)
栄養サポートチーム (NST) 担当
演 者: 和田 裕美 (国立国際医療センター戸山病院)
治験担当
演 者: 松井 孝男 (NHO長野病院) 糖尿病療養指導担当

関信ブロック管内における新型インフルエンザへの対応状況



独立行政法人国立病院機構本部
関東信越ブロック事務所統括部
臨床検査専門職 永 井 正 樹

メキシコでの発生に端を発した今回の新型インフルエンザは、急速に全世界に拡大し、ついにWHOはパンデミック（世界的大流行）を宣言し警戒水準をフェーズ6に引き上げた。我が国においても5月9日に初の感染患者を確認後、6月19日現在で740名の患者が確認されている。

今回の国内発生に伴い、国立病院機構を中心に成田空港における機内検疫業務や成田空港付近の停留施設に対して医師や看護師の応援派遣を実施した。機内検疫にはNHO 6施設とナショナルセンターおよびハンセン病療養所から、実派遣日数14日で、延べ98名（医師42名、看護師56名）を派遣し、停留施設へはNHO 8施設と国際医療センターから、実派遣日数19日で、

延べ76名（医師19名、看護師57名）をそれぞれ派遣した。

また、6月8日現在、都道府県からの要請と自施設の判断に基づいて、当ブロック管内の12施設において発熱外来を開設している。発熱外来とは、新型インフルエンザに係る診療を効率化し混乱を最小限にするために設置される外来専門の医療施設である。

一方、検査部門としても各施設で使用しているインフルエンザ迅速抗原検査キットとその在庫数について調査を行うと同時に、キットの供給体制についても確認した。

厚生労働省は6月19日に新指針を発表し、秋以降に訪れる第2波の流行に向けて、発熱外来が設置されている医療機関のみならず、原則としてすべての医療機関で診療を行うよう方針を変更している。各施設においては引き続き臨床検査部門として適切な対応をお願いしたい。

臨床検査研究会からの報告

第76回臨床検査研究会に参加して

NHO新潟病院 赤 堀 良 道

梅雨明けした、晴天の7月18日（土）に臨床検査研究会が国立がんセンター中央病院において開催されました。

当日は3連休の初日ということで会場に向かう電車の中は家族連れで賑わっていましたが、私は初めて参加する会で不安と緊張の中、会場に向かいました。開始時間の1時間前には到着しましたが、すでに何人か集まっており、その熱心さに感心しました。

始めに、関東信越ブロック 永井臨床検査専門職による連絡事項があり、①新臨床検査経営管理統計②国立病院機構経営状態について③臨床検査試薬の共同入札について④今年度の研修等について⑤臨床検査技師の役割について説明されました。

現在の統計業務が近いうちに新統計に変わるとのこと、準備をする様に具体的な説明がありました。昇任したばかりで最近やっと慣れてきた業務であったため戸惑いを感じましたが、先輩や仲間のアドバイスを

受けながら準備を進めたいと思います。

次に国立病院機構本部 奥田臨床検査専門職より、『目指すべき職場長とは』と題した特別講演がありました。リーダーの役割、今後の臨床検査技師に求められるもの、自分はまず何をすべきか、仲間をどう信頼し支援すべきかなど盛り沢山な内容で、とても解かり易く感銘を受けました。リーダーは何事も勇気をもって事にあたり、いかに人に感動を与えられるかが重要との話に、それらを踏まえて任務にあたろうと気持ちを新たにしました。新米副技師長として日常、悩まされる事について講演していただき、今後の厳しい環境に対応していく上で大変参考になりました。

研究会終了後は懇親会を行い相互の親睦を深めることができました。それぞれの悩みなどを話し合い、とても有意義な時を過ごすことができました。帰路の電車中、一人では何も出来ないが自分には仲間がいる事を実感し、これからの業務に希望が持てた一日でした。最後に、幹事および多忙の中ご講演をいただいた両専門職に深謝いたします。



医療技術職員等新採用職員研修を受講して



NHO沼田病院
上 野 将 臣

平成21年5月27日～28日の二日間にわたり、国立病院機構本部にて開催された医療技術職員等新採用職員研修に参加させていただきました。

研修1日目は、統括部長の「開会挨拶」からはじまり「国立病院機構の現状と病院職員としての心得」、「労働時間・休憩・休暇」についてそれぞれ総務経理課長と職員係長に講義して頂きました。

午後から「新採用職員として必要なこと」について6職種の先輩方、NHO東京医療センター薬剤科の江川真祐美先生、放射線科の花田剛士先生、霞ヶ浦医療センターから臨床検査科の藤本敬久先生、甲府病院リハビリテーション科の小笠祥子先生、村山医療センター栄養管理室の比嘉並誠先生、まつもと医療センター療育指導室の中村友亮先生から職種別分科会アドバイザーも兼ねていただき、医療人としてのアドバイスや厳しいお言葉、異動のメリット、デメリットなど、経験を元に分かりやすくまとめて教えていただきました。

職種別分科会では、各部門で「患者サービスとは」を討議テーマに、臨床検査部門は臨床検査技師21名と臨床工学技師3名が1班12人構成で討議しました。

私の班はそれぞれの病院の検査のあり方、経験、個人の考え方を踏まえ、臨床検査専門職永井正樹先生や藤本先生からアドバイスを頂き、検体の採取、扱い方から臨床側へ結果を正確に迅速に返すことを「患者サービス」としました。そのために必要なことは採取方法の理解、患者様への説明、日々の精度管理、メンテナンスが大切であり、専門知識を他のコメディカルに提供し、連携を行うことで臨床や患者様の診療のサポートができるような検査技師になりたいと思い、日々自己研鑽していこうと考えております。

研修2日目は、コミュニケーション・アカデミーの黒田真紀子先生にコミュニケーションの大切さを中心に、自己紹介の方法、受け取り方の違い、EQについて、自己EQチェック、電話対応、対面対応、言葉による説明の工夫、クレーム処理などについて細かく演習を交えて講義して頂き、中でも「伝えたことは相手の受け取り方次第で様々なり方がある」は、患者様に検査の説明をするときや会話をすることの難しさを学ぶことができました。

この研修を通じて、新採用者としての心得と医療従事者としての自覚を改めて認識しました。

また、他職種の方々と話し、どの様な事に携わり私たち検査技師と関わっているのかを知ることができました。

ここで知り合えた同期の皆様と切磋琢磨しながら、日々知識、技術の向上を目指し、臨床検査技師として更にステップアップできるよう頑張っていけたらと思います。

最後になりましたが、今回の研修会を企画、開催して下さった関信ブロック役員の皆様、ご多忙の中講義して下さった先生方に深く感謝、お礼申し上げます。



NHO相模原病院
水 野 正 浩

平成21年度の医療技術職員等新採用職員研修が国立病院機構本部において5月27日と28日の2日間の日程で開催され、受講して参りました。

私たち臨床検査以外に臨床工学、薬剤、放射線、リハビリテーション、栄養、療育の職種の採用された方が参加し、受講人数は国立病院機構・ナショナルセンター・ハンセン病療養所の各施設より124名が参加して開催されました。

研修内容は1日目に「国立病院職員としての心得について」講義があり、続いて「患者サービスとは」のテーマのもとに討議し、全体発表がありました。2日目には「EQを発揮した患者様とのコミュニケーション」という内容で接遇研修の講義と演習を行ないました。

1日目の全体討議ではそれぞれの職種ごとに内容をまとめました。臨床検査部門は、検体検査と生理機能検査に部門が分かれていて、その担当する部門によっては実際に患者さんと接しない部門があります。しかし、サービスを提供するという点については、患者さんに直接接しなくとも検体検査では迅速・正確に臨床側に結果を報告する事、生理機能検査や採血ではよく説明して検査しやすい環境を作る事や、採血技術の向上に努めていくことが患者サービスにつながると発表しました。また、他の職種からの発表内容で、専門知識や技術を自己研鑽するとともに職種間のコミュニケーションを良くすることにより、診療をサポートすることで患者サービスにつながるといった意見があり参考になりました。

2日目の接遇研修として、EQ（感情マネジメント）という観点で患者さんとのコミュニケーションについて研修しました。実際の内容は、まずコミュニケーションとは何かということ。また、電話対応と対面対応の基本、クレーム対応についてでした。特に強く印象に残った点は以下の2つの事です。

はじめに電話対応について、電話対応では視覚による情報が無い点が対面対応と異なり、迅速でかつ簡潔でなければならないと思い直す機会になりました。次に、クレーム対応について、理不尽なクレームは確かにあるかもしれないが、クレームを言われるという事は、その会社または病院が期待をされていると考えるようにしているという話を聴いてとても印象に残りました。

今回、研修を受講して患者さんと医療従事者との認識が違うことを改めて考えさせられました。思い込みで話さない事や病院という環境では患者さんや家族は感情的になりやすく相手の感情と自分の感情を理解して、会話や言葉遣いに気をつけるなど相手の立場に立って接していきたいと思いました。2日間にかけて研修に参加させていただき検査技師長をはじめ検査科職員の方々に感謝申し上げます。

平成20年度地区代表者会議議事録（要旨）

日時：平成21年6月6日(土)午後2時～午後4時

場所：国立がんセンター中央病院 管理棟1階 第2会議室

出席者：三浦、吉田、渡司、林、益田、沼田、川村、
山崎、深澤、峰岸、久間

東京・埼玉地区技師長会：原 田 正 一

茨 城 地 区 会：樋 口 久 晃

栃 木 地 区 会：松 林 守 守

群 馬 地 区 会：霜 田 重 雄

千 葉 地 区 会：名 賀 秀 己

神 奈 川 地 区 会：原 田 哲 志

新 潟 地 区 会：山 田 清 春

長 野 地 区 会：高 藤 博 博

山 梨 地 区 会：川 畑 久 久

関信ブロック臨床検査専門職：永 井 正 樹

(敬称略)

1. 開会の挨拶（渡司副支部長）

2. 支部長挨拶

関信支部としては、この会議を一番大事な会議として捉えている。活発にご意見ご検討をお願いしたい。

3. 平成20年度支部理事・地区代表者自己紹介

4. 関信支部経過報告

事務局、渉外部、学術部、広報部より活動報告がおこなわれた。これに対して、千葉地区と合同での症例検討会は好評であった、今後も何らかの形で継続の希望があった。微生物研修会では、新潟地区会員に講師依頼があった、これからも地区にこだわらない人選をお願いしたい。支部ニュースは、写真がクリアになる等読みやすくなった。支部の研修会等、活発に行われており感謝している、今後もお願いしたい等の意見がだされた。専門職からは、認定試験対策研修会は成果として出ており、超音波検査士34名、細胞検査士3名、輸血認定技師1名、微生物認定技師1名が新たに誕生したとの報告があった。

また、支部表彰者の地区会からの推薦をお願いし、本部表彰との調整は支部で行う事とした。37回学会の特別優秀賞選考委員は千葉地区会・群馬地区会代表とし、選考委員長は技師長協議会となる事が了承された。

5. 各地区会経過報告

各地区代表者より、組織状況及び活動報告がおこなわれた。

支部が提示している地区別会員数と、各地区会の提示している組織状況の会員数が食い違っているとの事であったが、調査時期の違いによるものである事を説明した。東京埼玉地区には地区会が無い事の疑問がだされたが、東京・埼玉地区技師長のほとんどは、本部・支部・技師長協議会の役員を担ってお

り、これ以上の役務負担は無理ではないか、また、支部研修会に参加しやすい環境にあり組織化しても利点が少ない面もあるが、会員が専門職と直接話をする機会と言う点では不利では等の意見がだされた。専門職からは、東京・埼玉地区でも直接話をする機会を作っていきたいとの事であった。

支部より、地区主催で行われている研修会のお知らせ等も支部事務局にご通知頂き、ホームページに掲載する事で他地区会員に情報提供していく事が提案された了承された。

6. 地区提出議題・支部提出議題

1) 茨城地区会

(1) 各地区での研修会開催について

地方からの参加は、交通費の負担が大きいいため各地区での研修会開催の考慮を、との希望がある。支部としては、今年の千葉地区と共催の症例検討会のような形で継続していく事、しかしそれぞれの地区を漏れなく回すには無理があるため、地方での研修会開催に支部助成金を有効にご活用頂きたい事、日臨技のe-ラーニング事業等、自己研鑽についても情報提供し了承された。

(2) 研修会資料のホームページへの掲載

講師の許可が必要な事など難しい部分もあるが、今後ホームページにセキュリティを設けて掲載するなど、検討する方向とした。

(3) 会場整理費の使い道について

講師料、研修会当日のお茶代に当てている。参加者数や講師料に差があるので研修会1回ごとの決済はできないが、融通しあって使用している現状が報告された。(残額は雑収入として計上している)

2) 栃木地区会

(1) 学会運営について

会員の70%が参加し、発表数も多数になり学術セミナーも充実してきている中、学会以外の会議等、学会日程が盛りだくさんすぎるのではないのか、会員がもっと本当に勉強する環境にするため、会場を含めた検討をお願いしたいとの事である。この件は、支部からの提出議題にて検討する事とした。

(2) 地区会ポスター賞の新設について

毎回、学会掲示のポスターを作るにはかなりの労力を費やしている。参加者の投票等による賞があったら励みになるのではとの提案があった。今年度に間に合うかは解らないが、今後の課題とした。

(3) 症例検討会について

遠方の施設では当日参加が難しい。事前に各施設で検討し集計結果を症例検討会に生かす等、何らかの形で全施設が参加できれば良いのではとの意見であったが、集計する作業量の面でも困難であるし、何施設か選んで紙面で事前に講師の先生に渡して回答頂く事は可能と思われる





が、当日の時間配分的にも今回以上に施設数を増やす事は不可能と考えられる事を了承頂いた。

3) 群馬地区会

(1) 院内感染対策等の研修会の開催

ノロウイルスの院内感染が起こった事もあり、会員の知識や意識向上のため開催を希望するとの事であったが、ブロック研修や各施設でも行われているため、支部としての企画は優先度的に難しいのではないかと説明された。

(2) 認定資格取得対策研修会の開催

今後も力をいれて欲しいとの事であった。これから直前の試験対策は必要であるが細胞検査士、超音波検査士は順調に取得者が増えてきているので、輸血、微生物に力を入れていきたい。また、検体検査系のモチベーション向上に向けて題材を選定していきたい事が説明された。

4) 千葉地区会

今回、症例検討会を支部と共催という形で行ったが、運営に関してもう少し地区会に任せてもらっても良かったのではとの事、今後に生かしていく事になった。

5) 新潟地区会

(1) 認定資格取得者への諸手当について

認定資格取得者で実務担当者には何らかの手当てが出せるよう要望してもらいたい。国臨協本部も技師長協議会も毎年要望している。本部専門職によると、機構本部でも理解は示しているが、具体化していないのが現状であると説明された。

(2) 関信支部学会発表者の交通費支給について

支部学会発表者の交通費支給に配慮して欲しいとの事であった。支部としては施設長宛てに案内を出す事は可能であるが、施設内で努力頂く事でご理解頂いた。

6) 長野地区会

人員が削減される場合、内示時点では以後の業務に苦慮する。早めに分かることは可能かとの事であった。専門職からは、組織としての問題であるので施設からもブロックに要望してもらおうと同時に、専門職からもブロックに要望するとの事であった。病院幹部には早めに伝わっていると思われるので、院内での情報収集も1つの方法ではないかとのお話もあった。

7) 支部提出議題

(1) 文化活動および研修会など各地区会との共同開催推進について

昨年度、地区会からの提案を受け、本年度症例検討会を千葉地区との共催で行い盛況であった。これを受けて支部から、学術のみでなく文

化活動についても考えていきたいと提案された。地方の若い会員には、関信支部という距離感があるが、認定試験対策の研修会でも地方開催する事で身近になり、地区の会員の意欲に繋がる機会になるのではとの意見もあった。交流会、研修会とも地理的に無理な面もあるが、できるところから行っていく事を確認した。

(2) 地区会総会の日程について

地区会総会の日程については、重なった場合支部で調整させて頂く事も可能か、検討して頂く事になった。専門職からは、できれば時期的に5月～10月の間で地区会にて要望を聞かせてもらえれば、年度の計画に盛り込んでいける旨のお話があった。

(3) 関信支部会期の見直し

会期を5月1日から翌年の4月末とする事で、定期総会を4月末（合同交流会と同時期）に移行し、支部学会は今まで通り9月に行う事を今年度総会に提案したい旨が説明された。役員人事や、本部会期とのずれは問題にならないか、遠方地区としては年2回東京に来なければならない経済負担の問題もあり参加者が減少するのでは等の意見が出されたが、学会スケジュールもタイトになって来ており学会運営上からも、会費納入など支部運営上からもメリットが上回ると言う事で、会期の見直しを行う方向で認識は一致した。

(4) 支部ニュース、ホームページの見直しについて

支部ニュースは、今後臨床検査を巡る時事問題も視野にいれ、取り上げていきたい。ホームページは、地区会のページの充実を図りたいので研修会等の予定をお知らせ頂きたい事、OB会、技師長協議会の情報の掲載を行う計画がある事、臨床検査Q&Aのページが工事中になっているので、ルーチンアドバイザーとも連絡を取ってリニューアルしていく方向である事が報告された。

7. その他

1) 栃木地区会

他地区との地区総会の同日開催を避けるため、会計年度を3月1日より翌年の2月と変更した。よって地区総会開催日は2月末ごろに予定するとの報告があった。

2) 新潟地区会

2010年4月からの国立高度専門医療センターの非公務員化は閣議決定しているが、我々国立病院機構の職員はどのようになるのか、人事交流も含め解る範囲でとの事であった。専門職からは、非公務員化の時期、人事交流についてもやっていく事は予想されるが、いずれも決定はされていないと説明された。

最後に永井専門職より、今後も活発に議論を行い、良いと思った事は実際にやってまた修正していく事が良い事ではないか、関信支部は良くまとまって活動しており心強い、関信支部全体が良い方向に向かうよう、今後も協力していきたいとのご挨拶を頂いた。

8. 閉会の挨拶（吉田副支部長）

（司会：渡司 書記：深澤）

国臨協関信支部・千葉地区会共催症例検討会

症例検討会結果報告

NHO千葉医療センター 小 沼 進 吉

平成21年5月30日(土)、NHO千葉医療センター地域医療研修センターに於いて国臨協関信支部主催・千葉地区会共催の症例検討会が開催されました。今回は初めての地方開催であり千葉医療センターが症例提示施設となりました。約90名と多くの会員が出席して下さいました。以下に症例の結果報告をします。

【症例1】70歳代女性。前医で上腹部腫瘍、胆石症、高血圧症で経過観察中、下痢・嘔吐・腹痛の胃腸炎症状が出現。当院消化器内科に紹介入院、その後外科へ転科となり上腹部腫瘍切除術が施行された。

【血液検査】ALP 569, GGT 95, UN55.4, Cre1.1, Glu159, HbA1C6.3, CEA1.4, CA19-9 12.8, DUPAN2 25, SPan1 30【腹部US】左上腹部に不均一低エコーを示す径15cm大の巨大な腫瘍を認めた。内部には多数の嚢胞性成分が見られた。カラードプラ法では腫瘍内部に血流像を認めた。【腹部CT・MRI】CTでは左上腹部に15cm大の腫瘍を認め、内部にはLow densityな嚢胞性部分が存在していた。MRI,T2強調像で不均一なHigh intensityを呈する腫瘍を認めた。

【手術】脾体尾部・脾臓合併切除、リンパ節郭清術。

【病理組織】17cm大の線維性被膜を有する結節性病変で、断面は他結節癒合状、小嚢胞の集族を思わせるスポンジ状。顕微鏡的にはSolid and cystic patternを呈する病変で、静脈侵襲(+), リンパ節転移(-)。免疫組織学的に神経内分泌系マーカー(+), 各種ホルモンマーカー(-)。診断はEndocrine tumor, high-grade malignant。

【まとめ】膵内分泌腫瘍は膵腫瘍全体の約2%と稀な腫瘍です。その大部分はインスリンなどの機能性腫瘍で占められ、非機能性腫瘍はその約15%とさらに稀です。悪性膵内分泌腫瘍の手術例の5年生存率は約75%と比較的良好です。

【症例2】70歳代女性。糖尿病、高血圧症にて外来治療中、全身倦怠感、食欲不振、全身痛が出現。消炎鎮痛薬を処方されるが改善せず、1ヶ月後には黄疸、右季肋部痛、肝機能障害も認められ、急性胆嚢炎の疑いで当院外科を紹介受診。著名な肝腫大を指摘され、精

査・加療目的で消化器内科へ転科入院となるも急速に症状悪化、入院9日目に肝障害・腎障害が急速に進行し、永眠された。【血液検査】T-bil/D-bil6.6/4.7,ALP 1797,AST/ALT316/152,LD1494,GGT1751,UN35.7, Cre1.72,CRP7.3,IL-2R1850,CEA43.7,CA19-9 66.5,CA125 199【腹部US・MRI】造影USおよびMRI,T2強調像で多発肝腫瘍を認めた。【胸部XP】右胸壁の軽度肥厚、胸水を認めた。【骨髄生検】上皮様異型細胞集塊を認めた。【病理組織：剖検】左肺上葉中極側を原発とする小細胞癌を認めた。右下肺胸膜面に播種巣、肝臓には多発性の転移巣、胸腺にも腫瘍の進展を認め、多数のリンパ節転移・浸潤を伴っていた。本症例は肺小細胞癌の多発転移に伴う肝不全・腎不全による腫瘍死と考える。【まとめ】剖検前には原発巣および組織型の断定には至らず、剖検後にNSE 2850,proGRP 20700およびその他の結果を得たが、本症例は急速に進行した症例であった。

稿を終えるにあたり、症例解説と「卵巢上皮性腫瘍の術中迅速細胞診」についてご講演をして頂いた当院診断治療研究室室長 永井雄一郎先生に深謝するとともにご協力頂いた関信支部理事および千葉地区会の皆様に感謝いたします。



国臨協関信支部・千葉地区会共催症例検討会に参加して

国立国際医療センター国府台病院

佐 戸 由 紀 子

平成21年5月30日に関信支部・千葉地区会共催の症例検討会が千葉医療センターにて開催されました。当

日は遠方からの参加も多数あり、立ち見が出る程の大盛況でした。

検討会の内容はとても有意義なものが多く、白熱した議論が展開されていました。超音波検査に携わる者として今後大いに活用させて頂きたいと思っております。

症例は2症例とも、検討後臨床検査科病理／診断治療研究室長永井雄一郎先生からの解りやすい解説がありました。

症例1は検査データからは原発癌の臓器の特定が困難であり、超音波所見やCT・MRIの画像から推定する非常に難しい症例でした。

症例2は提示された結果をみると診断は可能ですが、入院から死亡までの経過が短かく、剖検後に得られた情報から診断が確定したという症例でした。解説の中で特に印象に残ったのは下記の3点です。

- ①検査結果を迅速に。
- ②先入観にとらわれない。
- ③画像は専門の医師と検討することが必要。

このような視点から症例を学ぶことの大切さを実感いたしました。

症例検討会後に行われた「卵巢上皮性腫瘍の術中迅速細胞診」についての永井先生によるご講演も、大変興味深い内容であり勉強になりました。

最後に、症例提示と会場設定いただきました千葉医療センターの方々には大変なご苦労があったと思いますが、このようなとても良い症例検討会に参加させていただき感謝しております。



生化学研修会に参加して



国立国際医療センター戸山病院

隠 岐 博 文

平成21年8月1日（土）国立国際医療センター戸山病院にて、筑波大学病院 飯塚義明先生をお迎えし、「生化学検査を担当するに際して、知っておくべきこと」と題して研修会が行われました。当日は、夏休み

真っ只中の土曜日でしたが、129人の参加があり、ギリギリ照りつける外の太陽のごとく会場内は熱気にあふれていました。（でもちょっと冷房が効き過ぎていたかも…）

私は生理検査を担当しており、心電図や超音波検査など、患者様相手の仕事に日々頑張っています。生化学検査は賃金職員のときに約2年間担当しましたが、そのときは先輩の教えてくれた通りに仕事をこなすだけでした。現在では、2～3週間に一度回ってくる当直の時のみ生化学検査に携わっています。

当施設の当直状況は、検体数が夜間は約50件、昼間は約80件です。検体処理に追われつつ、夜中になると眠気と戦いながらの仕事となり、さらに臨床から結果催促の電話などがあると気持ちの余裕はさらになくなり、正直なところ分析機にお任せ状態になってしまうことも少なくありません。（私の場合ですが）

研修会の内容は検体の取り扱いやキャリブレーションなど基本的な事柄を中心にお話ししていただきました。検体の性状（溶血、乳びなど）や測定結果は注意していますが、お恥ずかしながら久しぶりに「Kファクター」や「反応タイムコース」という言葉を聞き、いかにハード的な部分に目がいてなかったかを再認識させられました。幸い分析機は生化学の担当者が、しっかりメンテナンスを行い、データ管理されていますのでトラブルが無く、安心して検査ができています。生化学の担当者には大変感謝しています。

今日の研修会は自分にとって良い復習かつ勉強になりました。この内容を意識しながら、明日からの当直業務に役立てていこうと思っています。

最後に講師の飯塚先生と今回の研修会を企画・開催してくださった関信支部役員に感謝申し上げます。

編集
後記

とうとう衆議院が解散になり戦後初めて真夏の選挙が行われることとなりました。各メディアでは各政党の様々な政策について話され、特に社会保障・福祉・医療が焦点のひとつとも言われています。今回の選挙により政権交代が起こるかもしれませんが、臨床検査技師として今やるべきことをしっかりと行うとともに医療政策がより良い方向に向かうことを希望してやみません。

広報部：久間 修平

ビア・パーティーに参加して

NHO東京医療センター

青 木 正 哉

平成21年8月1日（土）国臨協関信支部主催のビア・パーティーが新宿の銀座ライオンにて開催されました。その日も蒸し暑く、ビールで喉の渇きを癒すには絶好の日となり、総勢130名の会員の方々に加え、直前に行われた生化学研修会の講師、筑波大学の飯塚先生も参加されており、開会前からあちらこちらで会話の輪が広がっていました。

はじめに、林事務局長が開会の辞を述べられ、つづいて三浦支部長のご挨拶、永井専門職のご挨拶とつづき、吉田副支部長の乾杯でいよいよ会は盛大にスタートしました。次々と運ばれてくる料理と、冷たいビールで喉を潤しながら、お世話になった諸先輩の方々や、友人、後輩達と楽しいひと時を過ごすことができました。あまりに盛況のため、隣で話している方の声も聴き取れないほどの盛り上がりようで、また毎回恒例の施設紹介もこの熱気におされてか今回は省略されてしまうほどでした。会の閉めは、渡司副支部長の一本締めで終了となりました。

今回、数年ぶりに出席させていただき思ったことは、普段は一施設の技師として業務に当たらせていただいておりますが、本当はこんなにも多くの先輩、仲間達と共に同じ目標に向かって日々進んでいるのだと、今更ながら感じ、また心強く思ったしだいです。

最後になりましたが、このような会を企画して頂きました関信支部役員の皆様には深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



投稿者 青木さん

人 / 事 / 異 / 動

【平成21年5月31日付 辞職者】

氏 名	施設名	役職名	職 職
塩 澤 友 黄	水戸医療	技 師	辞 職
小 山 佳 巳	長野病院	技 師	辞 職

【平成21年6月1日付 異動者】

氏 名	施設名	役職名	旧施設	役職名
品 澤 美 樹	長野病院	技 師	国際医療国府台	技 師
富 永 悠 純	国際医療国府台	技師(採用)	国際医療戸山	非常勤
山 田 純 一	水戸医療	技師(採用)	国際医療戸山	非常勤
津志田 真 澄	国際医療戸山	非常勤		
横 井 貴 之	国際医療戸山	非常勤		

地区会だより

茨城地区会 定期総会・学術講演を終えて

NHO霞ヶ浦医療センター 藤 本 敬 久

平成21年5月16日(土)、茨城県立県民文化センターにおいて、第29回関信支部茨城地区会定期総会及び学術講演が行われました。当日は多数の会員参加のもと、関信ブロックより永井臨床検査専門職、関信支部より三浦支部長、林事務局長のご出席を頂きました。

学術講演では始めに、水戸医療センター臨床検査科長の小崎浩一郎先生より「臓器移植と臨床検査」と題してご講演を頂きました。レシピエントを決める際、その人が「正常」であるかどうか判断するのは、異常を判断することよりも難しいことがある。そのためには臨床検査の精度管理が非常に重要であり、十分に検査結果の持つ意味を理解して報告してほしい。と言うお話を頂き、改めて身が引き締まる思いがしました。続いて、永井臨床検査専門職より業務連絡があり、第二期を迎える検査試薬共同購入事業や、検査試薬統一化事業の進捗状況など、全国規模で動いているプロジェクトについて、今後の展望を交えてのお話を頂きました。

講演終了後、茨城地区会定期総会が行われました。平成20年度経過報告に始まり、会計報告、会計監査、平成21年度事業方針(案)、が承認され、次期役員を選出し終了致しました。

その後、会場を居酒屋「蔵矢」に移して、恒例の懇親会が行われ、会員相互の親睦・交流を深め、盛況のもと地区会総会は終了となりました。

最後にご講演して頂いた水戸医療センター臨床検査科長小崎浩一郎先生、永井臨床検査専門職、関信支部役員の皆様に心より感謝申し上げます。



平成20年度神奈川地区定期総会・学術特別講演を終えて

NHO久里浜アルコール症センター 太 田 雅 司

平成21年3月7日、NHO神奈川病院研修棟に於いて、平成20年度神奈川地区定期総会・学術/特別講演会を開催致しました。来賓として、関信支部より三浦支部長、吉田副支部長、統括部医療課より永井専門職の出席を賜りました。

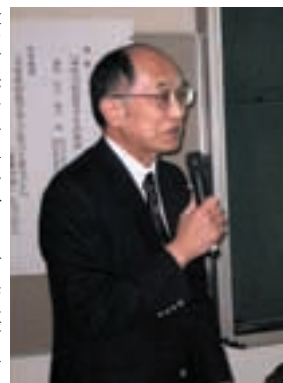


総会議長に日吾副技師長(相模原)が選出され、議案審議に入りました。経過報告、会計報告、会計監査報告、そして次年度の事業方針案、予算案が報告・審議され賛成多数により承認され総会は滞りなく無事に終了致しました。

続いて、神奈川病院・石川修子検査技師長による『神奈川病院電子化の現状(研究検査科導入経過)』について講演を頂きました。昨今、医療業務分野の電子化はめざましく独立行政法人国立病院機構の施設に於いても電子化の方向にあり、神奈川県下の各施設も時期的な多少の前後は有るものの全施設がオーダリングシステム化(電子化含む)導入の取り組みに入りました。このような現状を踏まえ、いち早く電子化を導入した神奈川病院に施設見学(電子化の現状)の実施と施設間相互の連帯感を構築する事を目的として、早期より計画

し当施設を総会会場に選考しました。担当施設の技師の皆様には、目に見えないご苦労など多々ご迷惑をおかけしましたが地区会役員一同、大変感謝しています。

特別講演として『大学病院長が役人になって思うこと、「医療の質」』について、現、横浜市病院事業管理者・病院経営局長、横浜市立大学名誉教授で有られる原 正道先生に講演を頂きました。先生は、「医療は科学とアートの組み合わせであり、30兆円を超える大きな産業分野で多くの職種が関わる汎社会的事業でもある。医療の崩壊が言われるこんにち、その再生が喫緊の課題である。」とし、次に問われるのは「医療の質」の向上であろう。と説かれ、また、感性と間の大切さ、正確に伝わるコミュニケーション、コメディカルキャリア・アップが今後の先進チーム医療の重要なキーワードになると提言されました。私達、臨床検査技師の立場に立った実に有意義な講演でした。



総会及び講演会終了後、場所を懇親会場に移し、永井臨床検査専門職、関信支部三浦支部長、吉田副支部長、学術/特別講演、講師の石川技師長、原先生、飛入り参加の奥田専門職を囲み会員の皆様との親睦を深めつつ楽しいひとときを過ごす事ができました。

神奈川地区総会に参加しご尽力いただいた皆様には、本当にありがとうございました。

平成21年度神奈川地区役員

会 長	原 田 哲 志	(箱 根)	新任
事務局	杉 原 理 恵	(久里浜)	新任
会 計	阿 部 真 利	(横浜医療)	留任
理 事	片 桐 理 絵	(相模原)	新任
	河 本 峰 奈	(神奈川)	新任